

---

# 予定調和のマネジメント

綾乃葵

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

予定調和のマネジメント

### 【Nコード】

N6791Y

### 【作者名】

綾乃葵

### 【あらすじ】

いつものように大学のレポート課題に終われる毎日を送るトシは非日常に憧れを抱く絶賛厨二病発症中の大学1年生。

ある雨の日彼のアパートの前にずぶぬれで倒れている少女を発見し介抱するのだが、目が覚めた少女はこう言った。

「私はあの世の魂の仲介人。今日からここに住まわせてもらうわ」

かくして、自称あの世の魂の仲介人とはちやめちやな同居生活が始まる。

そんな時どうします？

そのとんでも少女が家に居候を始めたのはいつのことだろうか。

人間界の時間で5日と22時間と42分前であったと思われる。

ちゃんとした時間かどうかは曖昧だ。その辺は勘弁してほしい。

何故なら今僕のアルミ製の腕時計はおおよそ5年と6ヶ月と言う時間を経てその寿命を全うしたからである。

簡単に説明すると。

電池が切れたので時計が止まってしまい正確な時間がわからない。

そういうことである。

ただ時間がわかったとしても。

のんびりマイペースを貫く僕は時計をおおよそ人より5分ほど時計の秒針を早く進めているのでどちらにせよ正確な時間はわからないのだが

そんなことどうでもいい。

今、僕の前で起きてる惨状を把握してもらいたい。

僕のテーブルコタツ（仮）は。

ある時は寒さをしのぎ冷えた体を生き返らせる神器となり、またある時は人間が生命を維持し活動し成長をするために必要な栄養素をとる行為を行う場所にもなる。

またある時は大学の単位という無理難題を押し付けるぶしつけな教授の期待にこたえるための書物を作成する場。

神聖な場所なのである。

即ち、聖域。サンクチュアリ！！

そしてそのさんくちゅありを汚そうと生意気な少女は僕の気持ちを裏切り一人ていーたいむを楽しんでいるのだ。

僕はふつふつとこみ上げるいろいろな衝動を交えながらジト目で少女をにらみつける

「なーに？トシも私のおきのお茶を飲みやがりますか？」

僕の込み上げる思いを知ってか知らずか少女はいつもの能天気な口調で言った。

「あのメリルさん。いつか聞こうかと思ったのですが、その高そうな茶葉とティーセットを購入されたお代金はどこから捻出されたのですか？」

「あー。うん、インテル戦略転換とかいう本の中の茶封筒に開けると死ぬって書いてあったから。ほら、私死なないからぬ。知的好奇心をくすぐりやがるのです。試しに開けたら福沢何とかさんが5人いたのでそつと懐にしまったのだが」

「しまうな」

間髪入れず突っ込む。

「つまり、要約すると俺が秘密裏に隠していた5万円をメリルさんは見つけ出してそれを懐に仕舞い込み、それを資金にエルメスのティーセットとなんだか高そうな紅茶の茶葉を購入して毎朝この神聖な場所で朝のティータイムを楽しんでるということ。間違いはないな？」

「違う」

「朝だけじゃなくてお昼とおやつの間と夕ご飯の後もだよ」

にこつと微笑んでさもそれが私の日常生活には欠かせないんだよと付け加えた。

この少女、名前はメリルという。

年の頃は12歳くらいだろうか

髪の色は艶のある栗色で肩の下まであるセミロング。

整った顔立ちだが、見た目のせいか美人というより可愛いと言ったほうが当てはまる。

童顔で幼さを残しているがネクタイにスカートで綺麗にまとめている。

特に目を引くのがスカートのベルトに取り付けられたたくさんの鍵を束ねる鍵束。

その鍵一つ一つに宝石が散りばめられており一見するとアクセサリに見える

中学生がちょっと背伸びファッションを試してみましたという感じの大人びたものだ。

まずはどういいうきさつで能天気中学生、自称：『あの世の不動産屋』の、この少女が

悠々自適で日々世界征服をたくらむ悪の組織を挫くために存在する『白来須俊彦』しぐるすとしひこ

大学1年生の不幸な現状を蒙ることに成ったのかを説明しなくてはならない。

6日前のあの日。

僕はいつもどおり大学のレポートと格闘していた。

沈黙を破ったのはインタホンだ。

宗教の勧誘やN Kの受信料の催促の訪問だと思っていた。

大学の知り合いには用事でアパートに来る場合、必ずインターホンの前に携帯電話にメールか電話で事前に連絡するようには口をすっぱくするほど言っている。

それが無いということはその線で間違いないだろう。

居留守。

一人暮らしをする上でこのスキルは習得せざる得ない重要なスキルであることは一人暮らしをした物なら理解してもらえらるだろう。

だが、インタホンは大抵1度2度、なった後、多いときは3度鳴り。暫くして諦めたように人の気配はなくなる。

それがいつものこと。

だが今日に限ってはいつもと違っていたのだ。

ぴんぽーん。ぴんぴんぴんぽーんぽーんぽんぽん。

暫くすると間を空けて

ぴんぽん　ぴんぽん。　ぴんぽぽぽん

三三七拍子だ。

僕は不覚にも興味を沸いてしまったのだ。こんなリズムカルにインターホンを押すやつがどんなやつかを。

いつもなら気配が消えるまで身を潜め物音を立てず、人がいない状態を作り出しているのだがふと、奇妙なインタホンを鳴らし方をするその生き物を確認したくなったのである。

人間の知的好奇心というものは恐ろしい。そんなことを考えながら



そろりそろり、とフローリングに足音を響かせないようにドアに近づく。

ゆっくりとフローリングの床をすり足で進む。

すり、すりり、すしゅ。

忍者や泥棒が使う抜き足差し足とはこのことだ。

物に手や足をひっかけて音を出さないように細心の注意を払いながら。

玄関のドアの前に到達した。

普段何気なく生活している1DKのアパートの6帖の部屋から伸びる玄関へのフローリングはとても距離のあるものに感じる。

たかが5メートルははかなく遠い。

僕はゆっくりと覗き込んだ。

このリズムカルに三三七拍子をインターホンで奏でる生き物はいったいどんな奴かを。

覗き込んだ先には。

誰もいなかった。

そう。覗き込んだ視界からは誰一人として確認できなかった。

くそ、一杯食わされた。

ピンポンドツシュである。

そう思った。

そしてドアを開けた時点でそれは敗北を意味する。

三三七拍子ぴんぼんさんは、必ずどこかで見ていることだろう。

間抜けな住民が「おかしいな？」と出てくることを。確認するために。

その時こそ、敗北が確定するのだ。

まんまと一杯を食わされた。それだけは避けたい。

だからチェーンを付けて少しだけドアを開けてみる。

ほんの少し、ほんの少しだ。

回りを確認するだけ。

それだけ  
それだけ  
それだけでいい。

息を潜めて間抜けな住民がドアをあけて飛び出してくるのを待ちわびているのだろう。

だが、その誘いには乗らない。

無関心、そう。

僕は引つかかってはいない。

周りを確認する。ほんのちょっと隙間を開けて、だ。

それで事足りる。

そう。

確認したらすぐに何事もなかったようにドアを閉めるだけでいい。

ざまあみろってんだ。

僕は小さくほくそ笑んでまだ始まってもない試合の勝利を確信しながらドアをあけた。

ドアの向こう、コンクリート作りの足場は濡れていた。

雨が吹き込んできたのだろうか。

アパートの部屋の出口はしっかり屋根があるタイプなので強烈な横風で雨が吹き込まない限り足場は濡れるはずがないのだが。

コンクリートの足場は雨水でびちゃびちゃだった。

なんだ、いたずらか、僕はほっとしてドアを閉めようとしたが、手を止めた。

水浸しの足場に何かを見つけたのだ。

茶色。いや、栗色に近い。

人間の髪のようなものがちらり見えた。

「あ・・・」

もっとはっきり確認するために僕はチェーンをはずしてドアを開ける。

視線の先には少女が仰向けで倒れていた。

中学生くらいだろう、だが服装は中学生のそれではない。

ずぶぬれだった。

長い時間雨に打たれたのであろう。少女が着ている服は雨でぐちよぐちよであった。

僕はあっけらかんとその現状をぼーっとみていると少女が　う。うーん・・・と小さくうめき声を上げた。

ふと、我に返る。

やばいものを見てしまったのではないか。

脳裏にとっさに「やばい」の3文字が思い浮かんでいた。

そしてタイミングよくカンカンとリズムカルにアパートの階段を登ってくる音が聞こえる。

さらにやばい。

ここで人に見つかったら色々モロモロやばい。かといってそのまま放置するにも。

自分のアパートの玄関の前にずぶぬれの少女が横たわっていたのであれば傍にいないとも問題があるだろう。

そしてこれから発見するであろう第三者にこの現場を見られるのはもっと問題がある。

僕はとっさに少女を抱き上げて部屋に入れていた。

そしてこれがそもそもの大きな間違이었다のである。

## 家出少女

少女が目覚めたのは雨が上がり日も暮れた頃だった。

緑色のふちどりのシンプルな掛け時計は午後6時を指していた。

あの後、とりあえずは着ているものを脱がせて（下着を除く）暖房をガンガンかけてベットに寝かせ布団をかけておいた。

少女とはいつでも女の子だ。

服を脱がせるのもかなり抵抗があったのだが、このまま風邪を引いてもらっても困るし、放置しておくわけにも行かない。

少女が目を覚ましてくれることを切に願ったが仕方ない。

これは正当である。と自分自身に言い聞かせた。

悪いが、僕はロリコンではない。

だが、この光景を誰かに見られたらなんといわれることであろう。

ロリコン、少女拉致監禁。

そして世間でロリコン男と蔑まれ、肩身の狭い思いをして生きていくだろう。

それは絶対いやだ。





「おはよ……。着てる服は今乾かしてるからとりあえずそれを着  
といて。」

恥ずかしい、という概念はないが精一杯気を使ったつもりだ。

僕は枕元にある綺麗にたたんである服を指差した。

「ありがとうー。まさかここで力尽きると思わなかった」

少女は目配せしてそうつぶやく。

「久しぶりこつちに降りてみたらライフスポット全部潰されちゃっ  
てて危なかったあー。ね？で相談んだけど暫くこの家にいてもい  
い？」

「駄目だ」

「なんで？」

「迷惑だ」

はっきりきっぱり言い放つ。

成り行きでこの少女を部屋に招き入れたとはいえどこぞの家で少女  
かもしれないこの女の子を引きとどまらせれば少女の家族も心配も  
するだろう。

もしかしたら搜索願いが出ているかもしれない。

「とりあえず、君、名前なんていうの？」

「女性に名前を聞く前に先に名乗るってのが筋じゃないかしら？」

少女はふふんと鼻を鳴らす。

「トシだ」

「そう、いい名前ですね。私はメリル。メリル・レグワルド＝クリ  
エンティス。あの世の魂の仲介人よ」

そういってメリルと名乗った少女はない胸を張って高らかに宣言したのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6791y/>

---

予定調和のマネジメント

2011年11月20日18時28分発行